お茶の時間

9月9日、テニスの錦織圭選手が全米オープンシングル決勝戦で敗れた。　う・う〜〜ん　残念。
でも錦織の大活躍で気分がいい。久し振りに晴れやかな気持。想像も出来ないほどの努力なのだろうな。

錦織の活躍で　にわかテニスファンが増えた、と嘆き節もあるような。いいじゃありませんか。

心に響く言葉

初心忘るべからず

（世阿弥）

未熟であった時の最初の試練や失敗ごとが「初心」という言葉の本当の意味と、「世阿弥の言葉」の中で能楽評論家の土屋恵一郎さんが述べているそうな。

初めに思い立った心、とか、やる気に満ちた、初々しい気持、という意味で使っていたけれど。

世阿弥の言葉は、奥が深い。

えだまめ

ぴゅひゅ〜〜〜〜〜

ネット動画で、外国の幼い子らがサヤから飛び出す枝豆にキャッキャ大笑いしながら見ている様子が配信されている。

今や枝豆は世界の様々な国に広まり、多くの人がその美味しさに魅了されている感じが画面から伝わった。

新潟は9月いっぱいまで美味しい枝豆を味わえる。ほぼ毎日食卓に上がる我が家。ニュースで、山形のだだちゃ豆が取り上げられるたびに、なぜ新潟の枝豆でないのかと口惜しい気にさせられるのが、新潟自慢の黒埼茶豆は、山形のだだちゃ豆の種が元なのだそうだから　そう目くじら立てることもないか、枝豆をこよなく愛して止まない新潟市民としては残念無念！　なのだ。

枝豆に含まれる成分の中にレシチンがある。レシチンは記憶力を高め、老化予防に効果がある。脳細胞の活性化を促すので記憶力や集中力を増大させることにより、老化の予防になることや、余分な脂肪の排出を促して動脈硬化や脂肪肝の予防にも効果がある。

又、トリプトファンという成分も豊富に含まれている。

トリプトファンをとることで不眠症の予防や改善などに役立つと言われてる。

これらの相乗により記憶力や集中力を一層高めることになる。

NHK番組「ためしてガッテン」で、出荷後数日立った枝豆も、獲れたての枝豆を茹でたものと同じ位のおいしさになる茹で方を放送していた。

湯の量に対して、塩2%、砂糖2%で茹でる。

流通の発達で美味しいものが簡単に味わえるようにはなったが、やっぱり現地で直接口にすると差は歴然。

季節問わず、とにかく美味しいもの豊富な新潟にぜひお出掛けいただきたい。

歯のよもやま話　第二十三話

歯と文学　一　和歌

文学に出てきた「歯」についてお話しましょう。

まず和歌について。

万葉集には残念ながらそのものずばりはないようです。平安時代の古今集や新古今集は、恋歌や花、季節の移り変わり等に重きを置いたものが主題のためどうも見あたりません。

しかし時代も下がってくると歯のような俗っぽい内容のものも出てくるようになります。内容は子どもの歯が生えた、歯が白くてきれいだ等肯定的なものもありますが、ほとんどは歯が痛いとか歯が抜けてしまったというさびしさを詠んだものが多いようです。

長野市の善光寺の堂照坊に親鸞聖人の七十四歳の時抜けた歯が祀られているそうです。抜けた時「いつのまに　かみに霜おきひと歯落ち　身にしみてこそ南無阿弥陀仏」と詠まれたそうです。

古事記伝を書いた本居宣長も、六十六歳の時に入歯をいれ、「思いきや　老いのくち木に春過ぎて　かかる若葉の又おひ(い)んとは」と歌を詠んでいます。

若山牧水の歌に「われを恨み　罵りはてに噤(つぐ)みたる　母のくちもとにひとつの歯もなき」というのがあります。口を閉じているのに歯がないことがわかったというのですから、入歯はなくてしわくちゃの唇だったのでしょう。また「白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけれ」が有名です。

石川啄木「痛む歯をおさへつつ　日が赤赤(あかあか)と冬の靄(もや)の中にのぼるを見たり」（悲しき玩具）。「夏来れば　うがひ薬の病(やまひ)ある　歯に沁(し)む朝のうれしかりけり」（一握の砂）。歯が痛かったのですね。「ひややかに　罎(びん)のならべる棚の前　歯せせる女をかなしとも見き」（一握の砂）。というのもあります。

与謝野晶子「ゆく水のざれ言きかす神の笑(まひ)御歯みはあざやかに花の夜あけぬ」（みだれ髪）。なんとなく艶めかしいですね。

斎藤茂吉「歯をもちて割るはしばみの白き実を従ひてくる妻に食はしむ」。欧州留学中現地に妻輝子を迎え、共にヨーロッパ各地を旅行中の作です。楽しい気分が伝わってきます。

正岡子規「下総の結城の里ゆ送り来し春の鶫(うずら)をくはん歯もがも」。病床にあって食べることのみに関心がありました。それなのに歯を悪くして食べられなくなった時の歌です。弟子の長塚節が送ってくれた鶫を食いたいのに…。

会津八一「はべりたつ　どうじがくちの　とがりはの　あなすがすがし　としのへぬれど」。高野山明王院の不動明王の脇侍の童子の歯がとんがっていてなんと清々しいことであろう。長い年月が経っているのに。

相馬御風（早稲田大学校歌都の西北作者・歌人・良寛研究家）「鬼追ふと　力をこめて撒きたりし　豆はひろへど　噛まむ歯ぞなき」五十八歳の作。歯周病がひどかったようです。「串あさり　もだし食みつつ　われとわが　歯のおとろへを　さびしみにけり」

なんだか寂しい話が多いですね。

子田晃一

発行　のりちゃんち編集室
編集　子田　則子
950-2072　新潟市西区松美台4−66　子田歯科医院　2階
Faxのみ　025-378-8582